ウラナミシジミの定方向連続飛行

磐　瀬　太　郎[1)]

Unidirectional serial flight of the Long-tailed Blues (*Lampides boeticus*, Lycaenidae)

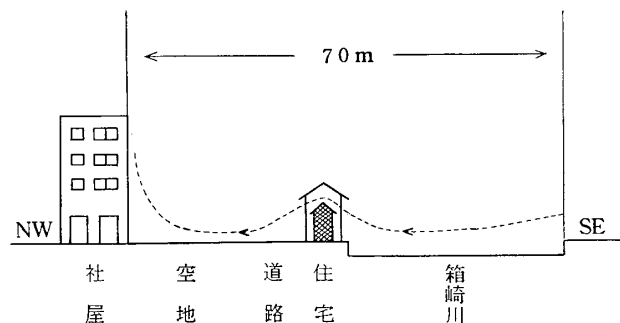
By Taro Iwase

ウラナミシジミが季節的に移動することは，今日わが国でも認められている．しかしそれは各地での記録や越冬習性などから割り出したものである．このチョウが一定の方向にかなりのまとまった数飛んで行くのを目撃した報告は，ピレネー山やインドにはあるが，日本ではまだない．ただそれに似たものが1つ，昆虫科学5号(1957)に西岡靖夫氏が1957年8月12日午前11時13分から2分間，徳島県小松島港から大阪府南端の深日港に向う汽船の上で，紀伊水道を紀州から淡路島方向に飛ぶ多数のイチモンジセセリに混って，このシジミチョウが飛ぶのを目撃報告している．

わたくしは1961年9月29日，全く偶然にも幸運にめぐまれて，東京都内で，このチョウが一定の方向に，かなり多数連続飛行して行くことを観察出来た．9月の末であるから，このチョウの北に拡がる主要な季節からは外れてはいるが，1つの有力な移動例として記録にとどめておきたい．要約していえば，東南から西北に30分間66頭の定方向連続飛行 unidirectional serial flight を認めたのである．

この日わたくしは東京都中央区日本橋小網町3丁目5の勤務先にいた．午後2時半から始まる筈の会議が，都合で4時開始にのびたので，3階の自席から見るともなく窓の外を眺めていた．この街はいわゆる新川筋で問屋やその倉庫が多く，特に酒問屋，醤油問屋が多く，草木などに全く恵まれない雑踏のちまたであるが，この日は何となくウラナミシジミが目についた．10分間程のうちに，かれこれ15頭位見たような気がしたので，2時45分から本気でメモをとり始めた．その直前のメモには，〃川→会社，1階の屋根，1分間，1～2頭〃と記してある．

窓は東南に面していて，その下は東の一隅にヒマラヤ杉が1本ある430平方m（正面25m，奥行17m）ほどの空地で，自動車の置場や，荷物の積み降し場に使われている．その先は11m幅の道路，それにそって細長く住宅と小屋（奥行5,6m）がならび，裏はすぐ34m幅の箱崎川になっており，対岸にも車輛置場などがある．つまりほぼ70mの低いコースで，その中ほどを住宅と小屋が横切っている．（**第1図**）

観察の正面は空地の左の4m幅の小路を含んで30m程にあたる．ウラナミシジミは箱崎川の向う岸から低く飛んで来て，この住宅にさえぎられ，中央の2階家をさけて，左の平屋の屋根（**第2図**A）か，右の小屋(同B)の上を，ちょうどハードルをこえるようにして1頭また1頭と飛びこえて来る．それから道路と空地に降下して進

第1図　ウラナミシジミ飛来状況概念図

第2図　ウラナミシジミ飛来観察現場
（10月12日撮影，広角レンズ使用）

1）東京都文京区湯島新花町4

み，またわたくしのいる4階建の社屋につきあたる．このコースの両側にも当然飛んでいると思うが，わたくしの席の位置が1mほど窓から内側で，右に次室との仕切り壁があり，左に他の建物があるので，額縁のように切りとられていて，特に窓から乗り出さなければ左右は見えない．下の空地にも，うろついているウラナミシジミがあるが，これは重複計算のおそれがあるので数えなかった．右手の箱崎橋上をくる個体は，不思議と余り多くなかったが，あっても数に入れなかった．また30分の間にモンシロチョウ4頭（重複計算のおそれが多い），イチモンジセセリ2頭，キチョウ1頭が見えたが，いずれも正面の住宅をのりこえて来たものではなかった．風は東寄り，温度29°C，湿度47%．

あとで地図上にウラナミシジミの飛来方向を求めたが，これが**第3図**のようになる．飛行方向を急角度にかえる特別の原因がなければ，東京湾をこえて千葉県木更津あたりから来たことになる．もちろん必ずそうとは断言出来ないが，そうでないと考える方が却って難しい．8月25日にはイチモンジセセリの薄い移動（1分3～8頭）をやはりこの社屋の窓から観察したが，飛来方向は北寄りで，地上ほぼ10mを飛んでいた．ウラナミシジミのように地物にそって降下する様子は見られなかった．

第3図　ウラナミシジミ飛来方向推定図（矢印上の黒点は観察地点）

9月29日のウラナミシジミのメモの結果は，2時45分から20分間で，写真のA点をこえたもの19頭，B点26頭，計45頭であり，♂♀の見わけは不能であった．3時5分からの10分はABを区別せず21頭，つまり3時15分までの30分間で66頭が，次から次と同じ方向に飛び来たり飛び去った．その後も4時まで大体の数を観察していたが傾向は変らなかった．その間キタテハ1頭と，破れ果てたナミアゲハらしいものを1頭見た．このナミアゲハらしいものは，やたらに物にとまりたがり，垂直な羽目板にまでとまりたがる有様は，大きなガを思わせたが，通りがかったオート3輪の積荷にはりついたまま箱崎橋を渡って運び去られた．

この日のウラナミシジミの観察は，20数年来このチョウの移動のことを考えて来たわたくしにとって，異常な感銘を覚える経験であった．地形にめぐまれていたので，比較的純粋な形でメモがとれたのは幸であった．幅30mの70m直線コースで，その中間に適度の障害物があり，それをのりこえて来る個体数を高い所から数えるのは誠に便利であった．1頭2頭と飛んでいるのを見ただけでは，これが大きな連続の流れの構成分子であることはすぐには気がつかない．今までも何回か遭遇したことであろうに見のがしていたものと思う．こんな現象があることを一度経験した以上，これからは街にこのチョウを多数見かける日には，注意して観察することにする．わたくしの観察日記にも，時々街で多数のチョウを見かけた記事がある．1959年10月15日には，〝自宅会社往復の間に多数のチョウを見る．モンシロ，キチョウ，キタテハ，ウラナミシジミ2〟とあり，1954年にも同じような記事が残っている．

今回の記録は9月末のことであるし，1例にすぎないので，意味をつけるのは早計と思う．単に報告にとどめておきたい．（19/X 1961）

Summary

On September 29th, 1961, I observed an unidirectional serial flight of *Lampides boeticus* in downtown Tokyo. From 2.45 to 3.15 p.m., 66 blues were counted flying SE–NW in a constant stream across 30 metre front. Weather fine, wind easterly, temperature 29°C, humidity 47%.